

はじめに

秋 山 聰

これまで人文社会系研究科・文学部は新宮市のみなさまと少しずつ関係を強めて参りました。東京大学は、濱田純一前総長時代の2012年に、学部生を「よりタフにグローバルに」育成するための手段の一つとして全学事業「体験活動プログラム」を立ち上げました。2015年に私が別件で新宮市の楠本前教育長とお会いした際に、半ば戯れのように、熊野地方でプログラムを作ることができたら、熊野古道や大峯奥駆道を体験させてヤワな東大生をタフにできようし、如何なる者の来訪をも拒まない熊野の方々からグローバルたることを学びうるのではないかと、言ったようなことをお話したところ、幸いにも興味を持っていただくことができ、2017年度から「聖地熊野の歴史文化と自然を体験しつつ、新宮市の文化行政を学ぶ」というプログラムを立ち上げることができました。2020年度は残念ながら新型コロナ禍のために中止となりましたが、このプログラムに参加した学生たちは熊野での様々な体験を通して、見聞や視野を広げることができ、人としての幅を広げることが出来たように思われます。田岡市長や楠本前教育長、速水教育長も参加してくださった懇親会では、学生に一人最低一問は質問をすることを課したところ、鋭い質問が続き、市長もたじたじとなったこともありました。

体験活動プログラムを進める傍ら、国際熊野学会や環境問題研究会等の新宮市民が積極的に運営している研究団体と共同で外国人研究者の講演会や学術団体の大会等を新宮市で開催したりする内に、部局の新事業として新宮市との協働で、人文学による地域社会連携何か新たに行えないかという機運が高まってきました。新宮市には既に熊野学を掲げての地域振興の実績が20年あまりあります。その更なる活性化・国際化という点でお手伝いすると共に、留学生や大学院生の研修の場とさせていただく、といった形の互恵的な関係を築くことが、双方に有益ではないかと考えました。試行錯誤の末、2019年度、総長裁量経費を得て、人文社会系研究科・文学部は、「東大人文・熊野プロジェクト」として、新宮市や国際熊野学会、環境問題研究会等と連携して、幾つかの事業を行なうことになりました。予算が確定したのが11月中旬ということもあって、とりあえず年度内に、些か慌ただしくはありますが、三つの催しを行なうこととなりました。その第一弾として2020年1月12日に本郷キャンパス文学部一番大教室を会場にして、国際熊野学会と共同で開催したのが、「聖地の記述と記憶——熊野を中心に——」と題した「第1回東大人文・熊野フォーラム」でした。以下は、登壇していただいた方々による論考となります。

このシンポジウムでは、熊野側から林雅彦明治大学名誉教授と山本殖生国際熊野学会代表委員をお招きし、本部長教員とともに、講演していただくとともに、議論していただきました。熊野は日本最古の聖地の一つであるとともに、現代に至るまで様々にその相貌を変えつつも、比類のない特徴を持つ聖地とみなされてきました。また、熊野の人々は、長い年月を通じて一貫して、多様な人々を寛容に受け入れてきましたが、今なお、国境を越えて、様々な人々を惹

きつけ続けており、実際、熊野古道を歩いてみると、日本人よりもフランスを中心とした欧米の観光客の方が多かったりもします。本シンポジウムでは、国文学、熊野学、西洋古代美術史、中国思想文化学、日本建築史といった分野からの専門家が、様々な観点から熊野をはじめ、諸外国の聖地についての記述や記録を取り上げ、相互比較を通じて、熊野の独自性をうかがわがらせるべく相対化するという試みに挑みました。聖地についての記述／記録と一口に言っても、言語による記述だけではなく、図面や造形物等の非文字資料・視覚資料、あるいは巡礼や修行といった身体的行為の記録・口伝等、実に多彩であり、時代により様々に変容しうる聖地の有り様を再現するためには多角的な考察が不可避となります。もとより、結論が出るわけではなく、むしろ今後検討すべき無数のトピックが浮かび上がってきたように思われますが、その事こそが、人文学を中核とする我々の部局が熊野のみならずと協働しつづける意義を示しているようにも思われます。

このシンポジウムの後、2月末から3月初頭にかけて「東大人文・熊野プロジェクト」の第二弾として「東大人文・留学生／大学院生研修」を催行しました。大学院に在籍する外国人留学生4名と日本人大学院生2名が、熊野を訪れ、熊野古道を歩いたり、神倉権現に登ったり、浮島の森で自然観察をしたりするとともに、熊野学研究委員会の先生方からのレクチャーを受けただけではなく、新型コロナ禍の影響により残念ながら限定公開という形になりましたが、「若手フォーラム」として自らの研究内容を市民の方々に紹介しました。研究者を志す大学院生に自らの研究内容を早期に一般の方々に説明するという試みは、これまであまり行われてきませんでした。留学生が流暢な日本語により水戸藩の国学者や江戸時代の内裏の有り様等について熱弁し、それに対して市民の方々から積極的な質問がなされるという場に立ち会って、こうした機会を設けることの大切さを改めて認識することとなりました。ちなみに、この研修に参加した大学院生の内4名から提出されたレポートは、地元紙『熊野新聞』に4回にわたって連載されました。なお、第三弾として準備しておりましたジュネーブ大学における絵解きの実演を交えての「国際フォーラム」の開催は、残念ながらやはり新型コロナ禍の影響による無期延期となっています。この未曾有の災厄がいちはやく終息し、遠からず「東大人文・熊野プロジェクト」が完全な形で催行できることを願うばかりです。

付記 「第1回東大人文・熊野フォーラム」(「聖地の記述／記録——熊野を中心として——」)は、2019年度東京大学総長裁量経費および科学研究費補助金挑戦的研究18K18477、基盤研究(B)18H00629により催行された。